

御伽草子『花みつ月みつ』の諸本について

大地 美紀子

一、はじめに

御伽草子『花みつ月みつ（花みつ・月みつ花みつ）』の成立期、主要伝本は次の通りである。

【成立期】
室町後期か。⁽¹⁾

【伝本】

松本隆信氏の「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」⁽²⁾によると、本作の伝本は次の通りである（〈 〉内は本解題で使用する略称である）。

(一) 京都大学文学部国語学国文学研究室蔵奈良絵本二冊『花みつ』
〈京大本〉

(二) 静嘉堂文庫蔵写本一冊『花みつ月みつ』⁽⁴⁾〈静嘉堂本1〉

(三) 静嘉堂文庫蔵写本一冊の内『花みつ月みつ』(『道明のさうし』

御伽草子『花みつ月みつ』の諸本について(大地)

と合冊)⁽⁵⁾〈静嘉堂本2〉

(四) 高山市郷土館蔵写本一冊『月みつ花みつ』⁽⁶⁾〈高山本〉

(五) 武田祐吉氏旧蔵奈良絵本二冊『花みつ』⁽⁷⁾〈武田本〉

『花みつ月みつ』の本文研究としては、『京都大学蔵 むろまちものがたり 第一二巻』(臨川書店、二〇〇三・六)所収の菅原領子氏による解題があるのみであるが、「諸本の関係の親疎は複雑で、系統立てることはやはり困難である。(……)今後の研究が待たれよう」とあり、どの本が善本か、その答えは出ていない。

そこで本稿では、諸本五本を比較し、最も矛盾を含んでいないという意味において善本と呼ぶに相応しい本を探っていききたい。

二、諸本の関係

まずは、諸本の間関係を見る為に、諸本五本を詳細に照らし合わせ、表を作成した。

【諸本対照表】

※○・●はそれぞれを付したものと士が近いことを示す。その際に着目した部分には傍線もしくは波線を付した。
 ※☆は独自のものであることを示す。

対照表を総合して図式化すると、次のようになる。

場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
足利尊氏の動向、赤松則祐の功績	※京大本にのみ。他本には無い。				
岡部の紹介	○「こ、にをかべといふしんぎのもの一人はんべり。きりやうこつがら人にすぐれて、ぶんぶ二だうのつわものなり。しうじんのきもよく心にあひかなへり。しかればはりまにし八ぐんをたまはつて」	○「おかへといふ、人あり、新さとは申なから、きりやう、こつがら、人にすぐれたるによりて、はりまにし八ぐんの、しゆこ代を仰つけしかは」	●「岡部といふ者有。仁義の者と申なから、よきこつから藝のふ才覚、人にすぐれたるにより、播摩の国のしゆこ代を給りし。其家富貴申に及はず。」	●「おかへといふ人あり、さいかく、人にすぐれたるゆへにより、はりまのくにの、しゆことなりたもふ、そのいへ、ふつきとして」	●「おかへのなにかしと、いふ人あり。さして、きうこうの人にては、なかりしかとも、きりやうさいかく、世にすぐれたるによつて、はりまのくに、はんこくの、しゆこ代をあつかり、其いゑふつきとなり」
申し子	○「つほめる花を一ふさたまはるに、あをきはのありし、風にちる」		○「いまたつほめる花を給候か、青葉にちる」		○「つほめる花を、給はるとみて、さては、しよくわんしやうしゆの、おもひをなし給ふ。されとも、あをはにてちる」
男子が産まれ、「花みつ」と名付けられる		○「夢にまかせて、御名を、花みつ殿とぞ申ける」	○「夢想になそらへて、名をは花光殿とぞつけられたる」		○「御むそうによそへて、御名をは、花みつ殿となつけ、」
赤松、岡部を召す ・時期 ・赤松の言葉		○「それかし、のほるへきか、われら、のほるとも、御ふんも、のほらて、かなふまし。しよせん、こふん、のほ	○「某、上るとも、御ふん上らてかなふまし。しよせん、御ふん上らは、某名字を名乗」	●「はなみつ、二さいと申、きさらきころ」	●「花みつ、二さいの、はるのころ」

場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
岡部、京へ上り、新たな女房を迎える 二人目の妻、男子を産み、男子は「月みつ」と名付けられる ・産まれた日	○「ひよくれんりのおもひをなし」 ●「九月十三夜」	○「つねに来る、かつら」 ○「ひよくれんりの契り、あさからす」 ●「九月十三夜」	○「天にあらはひよくの鳥、地にすまはれんりの枝と契り」 ●「九月十三夜」	○「いさや御せん、あいにくして、はりまのくにへ、くたり給ふ」	●「九月十三日、夜」
岡部、二人目の妻と月みつを連れて戻る	●「はじめていゑをつくり、あたらし殿とぞ申ける。」	●「はじめて、いゑをつくりをかれ、人、あたらし殿と、もてなしける」	●「別にやかたを作り、あたらし殿と賞翫して、」	●「はじめて、いへつくり、あたらしのとぞ、申けり」	
岡部、子を山寺に上らせようと考える	○「花みつ十さいになりけるとき」	○「十さいになる、花みつ」 ○「おかへとの、おもふやう、きやうたいを、いたつらに、をきては、かなふまし、いかならん、山寺へものほせ、かくもんをもさせはやと、しあんしけるか」	☆「花光十二」 ●「月光九」	○「はなみつとのわささい」 ●「月みつとのわ、九さいなり」	○「花みつ十さい」 ●「月みつ、九つとし」
岡部、花みつを連れて書写山に上り、別当と対面	○「花みつのこしをば、えんちかくか、せければ」 ●「としのよはひ十さい」	○「花みつ殿は、こしにのせて、えんまてそ、かき入たりければ」 ●「としのほど、十はか	○「花光殿は、えんのきわまてこしかきよせ、こしよりおりられけり」		○「おかへ、おほしめしけるは、かれらきやうを、かくいたつらにをく事も、よしなし、よしや山へのほせ、かくもんさせんと、おもひ」
・花みつの描写					※描写の部分はナシ

場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
岡部と別当のやり取り ・別当の言葉	ばかりとみえたるちごのいろしろくうつくしきが、いろこそでこせいがうの大きくちはくときなし、うすげしやうしたる」	りなるちこ、色々の小袖に、せいかうの大きく、ゆるくときなして、うすげしやうにて」	○「愚僧か身には、所領もほしからず。まして御重代も思いもよらず候。之に御座し少人さま、さためて山へも寺へも御やくそくそ候らんしはしかく程なりとも、別当後見仕候へく候や」		
酒を飲む別当	●「べつたうあまりのうれしさに、三ばいのみて」	○「くそがか身において、所りやうも、ましてその外の物も、ほしからず候。おほしめしもよらぬ、申事なれとも、是にまします少人はさためて、山へもてらへも、御ぬしは候はんとすれとも、しはしかほと、これに、へつたうあつかり、こうけん申さむ」 ●「へつたう、よろこひ給ひて、三はいつ、けて、のまれける」	●「別当、なのめならずよろこひて、やかてさしうけく三益のまれけり」	●「へつたう、よろこひて、さかつき、とりあけ、三と、のみたまふ」	
岡部、花みつを置いて 書写山を下る		○「こわかたう一人つけて、かへられけり。へつたう、申さる、は、山てらに、わか殿はらは、かなふましと、ありしかは、わらは一人、のほせけり」	○「こののはら一人つけておかれけり、十日はかり有て、別当より人を下し、山寺などに若殿原の御入しかるへからず候、童はなんとはよく候へきと、申されければ、けにもとて、童をのほ□られける」		
岡部、考えて、月みつも書写山に上らせる	○「いまは月みつもいかにうら山しくおもふらん」	●「月みつか母、いかにうらやましく、おもふらん」	●「月光か母、さそうら山しくもおもふらん」	○「つきみつ、いかにうらやましく、おもふらん」	

場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
書写山での花みつと月みつの様子	○「しよしやは三百ばう」 ●「一千よ人のらうにやうく」		○「しよしやは三百坊」 ●「しゆとのかすは千人はかり」	○「しよしやは、三百坊」	○「しよしや三百はう」 ●「しゆとのかすは、をよそ、千よ人」
書写山における花みつと月みつの比較	○「花みつ殿のは、上はほんだいにてまします上は」 ○「花みつ殿十四」 ☆花みつの母の遺言		○「花光殿はもと成本台の事なれば」	○「はなみつとのは、ほんたいにてましますは」	※この場面はナシ
花みつの母、亡くなる		○「花みつ殿十四」		○「はなみつとの、十四」 ●「は、こせん、二三日かほと、かせの心ちと、なやみたまいて」	●「花みつ殿の、は、うへ、た、かりそめの、風の心ちと、の給ひて」 ☆花みつの母の遺言（京大本とは内容が異なる）
岡部、京に上る	○「あかまつ殿もじやうらくあり。をかべも御とも申てのほりけり」	○「赤松殿、都へ上りやまふ。岡部も、御供申て、上りける」		○「四十九日も、すきければ」	○「あかまつ殿、みやこへのほり給へは、おかへも、御ともにまいり」
岡部、京より花みつに思いを馳せ、花みつを慈しむように月みつの母に文を送る		○「まことならぬ親にて」	○「継母なれば」 ●「京より色くの小袖を下し」		●「としくれの小袖を、と、のへて」
月みつの母、花みつを冷遇し、書写山の人々の心も花みつから月みつへと移る	○「これはばうずの御かたへ。これはこしの御かたへ」	○「坊主の御したへ、これは、こしのはうへ」	○「之は坊主の方へ、これはこしの御坊へ」	○「これわ、はうずの御かたへ、かれは、こしの御かたへ」	
京より戻った岡部に、月みつの母、讒言する	○「花みつ殿はばうずの御かたよりしばらくのあひだふけうあるべし」	●「はうずのかたより、申くたされしは、花満殿、ふようにより、かんだうとや	○「花光とのは坊主の此程御ふけうと仰事候」	○「へつとう、ふきやうせられて、おわするそや」	●「へつたう、御かんだうのよしを、うけ給る」

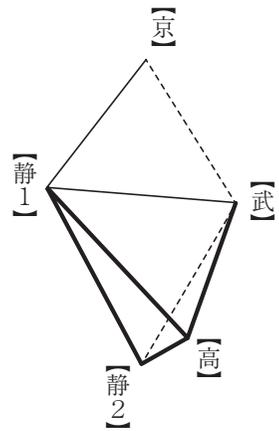
場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
岡部、書写山に人を遣り、一人帰ってくるよう月みつに文を送る		○「月みつ、ひさしく見候はて、ゆかしく候、とくくたり候へ、花満は、まつしさいあり、こなたより、むかへをやらん時、下候へ」	○「京よりこそ下りて候へ。久しくみ、はねは、こひしく候に、急き下り候へ。花光は、おもふ子細有。おつて追をのほすへし。月光一人、下候へ」	○「月みつ、久しく見候はて、ゆかしく候あいた、とくく、くたりたまへ、はなみつは、おもふしさいあり、いかさま、むかひをのほすへし、そのとき、くたりたまへ」	
月みつ、花みつと言葉を交わした後、山を下る		○「さしもみたれぬくろかみを、袖にてしなつるやうに、うちまきはし給ける」		○「さしもみたれぬ、くろかみを、なつるやうに、まきらかし」	
岡部と月みつの対面	●「かのは、のくさのかげにても」	●「草のかけの母のゆふれい」		●「くさのかけにても」	
岡部、書写山に上り、別当と対面	※ナシ	※ナシ	○「はたこふるいのために」	○「へつたうに、はた五ふるまいと」	※ナシ
花みつ、父を見送る	○「はたいたのすき」 ●「めとくみあはせけり」	○「はたいたのひま」 ●「たかいにめとめを、見あはせけれと」		●「めとく、見やわせけれは」	●「たかひに、めとく見あはせて」
花みつ、嘆く	○「つゐになくくへやへかへりて」	○「わかへやにかへりて」		○「かへりて、へやに、たちかへり」	
花みつ、召し使つている童を遣わし、二人の法師を社参に誘う	○「まつわう丸」 ●「大夫」	○「松わう丸」 ☆「大夫」 ○「松わう丸、うけ給、二人の人々のかたへゆき、此よしかくと申けり」	●「大夫」	○「まつわう丸」 ●「大夫」	○「まつわう丸」 ●「大夫」
花みつたち、社参	○「二人が一人はまへに一人はうしろにたち」 ☆童も含む四人で社参 ○「によりりんだう」	○「大夫はさきに、侍従は跡にゆく」 ●「まつわう丸は御留守」 ○「によりりんだう」	○「大夫は前に、侍従は跡に、児は中に」 ●「童は帰り、留主」 ○「如意輪堂」	※三人で社参	※三人で社参

場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
花みつ、二人の法師に月みつ殺害を依頼し、二人の法師は了承するが、嘆く	○「つゆきえん花のあさがほいつまでと、はかなきいのちありあけの、月もかたぶくなごりにて」	○「あさがほの露のいのち、あり明の月満殿、さえ給はん名残をしたひ、なきゐたり」	○「十六日」	○「いたはしや、つゆけきはなの、あさかほの、月かけたにも、いとうよに、おもわぬかたに」	○「十六日」
月みつに変装した花みつ、二人の法師に殺される	○「十六日」	☆「八月十五日の月も、あかつきかた」	○「十六日」	○「八月十六日」	○「十六日」
・花みつの描写	○「十四五はかり」 ●「花みつ殿に、すこしもたかはす」	●「あし引の山のあなた の里人のおしむ月出てもやらず山のはにひらめきて」	○「縁に候て、ぬのしとみによりそいて、やさしけなる声にて、花光殿、御入候かと、二声三声よはなれとも」	●「山のはにやすらひ て、あしひきの山のあなた、さと人の、をしむとすれと、出ぬれは」	○「十四五はかり」 ●「花みつ殿の御うしろ かけに、よくに給へる」
・殺害の瞬間	○「大夫はあまりのかなしさに、はしりよりあしをむんずといだきつ、じゅうはおもひきらではとて、いぢのか、りを二かたなさして、すてたてまつる」	○「太ゆふ、あまりのかなしき、はしりよりなして、むすとたく、しゅう、思ひきり、さしよりて、ひちのか、りを、二かたなさして、うちすてたてまつる」	○「大夫、あまりのかなしきに、むすといたきで、二てうよ、いまは思ひきれ、ゆいかいなしやと、い、ま、に、ひしのか、りを、二かたな、とをれくどさして、かつはと、すてたてまつり」	○「大夫、あまりのかなしきに、むすといたきで、二てうよ、いまは思ひきれ、ゆいかいなしやと、い、ま、に、ひしのか、りを、二かたな、とをれくどさして、かつはと、すてたてまつり」	○「大夫、はしりより、むすといたいて、をしふせたり。し、うも、おもひきりたりとて、こしのかたなを、するりとぬき、ひじのか、りを、二かたなさして、かつはと、つきすて」
花みつが殺されているのが発見される	○「ほうしの身にてちごをせつがいする事は、ためしなきしだいなり」	○「ほうしの身にて、ちごを、てにかけ申ことよ」	○「大息つき」 ●「花光とのを、人の殺	○「ほうしのみにて、ちごをてにかけ、ころしつるものかな」	○「ほうしの身にて、ちごをころすためし、むかしもいまも、これやはしめならん」 ●「大いきをつきて」
・発見者の言葉	○「花満殿を、た、いま	○「花満殿を、た、いま	○「花光とのを、人の殺	○「おういきついで」 ●「花みつとのを、人か	○「大いきをつきて」 ●「大いきをつきて」

場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
<p>二人、呼ばれる</p> <p>二人の法師、真相を告げて自害しようとするのを、人々がとめる</p> <p>・ 別当の言葉</p>	<p>※ナシ</p>	<p>人か、ころしたてまつりて候」</p> <p>●「まづ、太ゆふ、し、う殿に、此よしつけよ」</p> <p>○「門をあらげなくた、き」</p>	<p>し申て候」</p> <p>※ナシ</p>	<p>ころしたるそ」</p> <p>●「大夫との、二てうとのに、つけよ」</p> <p>○「かとを、あらげなくた、きければ」</p>	<p>※ナシ</p>
<p>二人の法師</p> <p>・ 月みつの言葉</p> <p>・ 月みつの様子</p>	<p>○「此ちこ十さいといひしとき、しんぶにこひ申、十六のいまにいたるまで」</p> <p>※この部分はナシ</p> <p>※この部分はナシ</p> <p>※この部分はナシ</p> <p>※この部分はナシ</p>	<p>○「このちこ、十さいの春より、十六のいまにいたるまで」</p> <p>●「こしやうほたいをも、たのみ申さんと、思ひしに」</p> <p>●「これは、いかなるもの、しわさそや、いつくへ、われをすて、ゆき給ふぞ」</p> <p>○「天にあふき、地にふし、なけき給、御ありさま、まことに、めもあてられぬふせいなき、かたもなし」</p> <p>●「またともなき、きやうたい」</p> <p>●「いつの世にかは、あひたてまつるへき」</p>	<p>●「後生をもとはれんとおもひしに」</p> <p>○「天にあふき、地にふし、歎き給ふ有さま、たとへんかたそなかりける」</p>	<p>○「花みつとの、十さいの春より、十六の、いまに、いたるまで」</p> <p>●「のちのよを、とわせんとこそ思ひしに」</p> <p>●「これは、いかなる人の、しはさそや、我をすて、いつくゑ、いかなる事を」</p>	<p>○「十さいの、はるのころより、おかへ殿に、こひうけ、十六のいまに、いたるまで」</p> <p>●「なきあとをも、とふられんと、おもひしに」</p> <p>●「いかなる人の、しわさにて、この花みつを、ころしけるそや、おいおとろへたる、我をのこし、さきたち給ふ」</p>
<p>○「辞退申て候へは」</p>	<p>○「いつくへゆかせ給ふ」</p> <p>●「またとなき兄弟」</p>	<p>●「又ふたりともなき、きやうたい」</p> <p>○「いつくゑ、おわするそや」</p> <p>●「いつのよにかは、あふへきそ」</p> <p>○「しはしは、したひ申に」</p>	<p>○「いつくへか、ゆかせ給ふそや」</p> <p>●「又いつの世にかは、あふへき」</p>		

場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
場面 ・月みつ ・別当	○「めんく」 ●「此人をとぶらひ申べ けれ」	○「月満殿と思ひて、こ ろし申て候へは」 ●「三つの大か、しての 山にて、花満殿におひ つき申、御ともせん」 ●「我らも、またともな き、きやうたいを、さ さきたて、いきて有 ても、かひもなし」 ○「めんく」 ●「御あとをとぶらひ給 へ」	○「御身たちをこそ、花 光か形見ともおほへけ れ」 ●「みつからもまたとも なきおとといを一人 さきたて、候へは、我 も残りにてなにかせん」	○「月みつとのをとそん し、うちたてまつりて 候へは」 ○「めんく」 ●「又ともなき、きやう たいにおくれ、いのち おしむにあらねども」	○「めんく」 ●「又もなききやうたい を、さきたてて、な に、いのちの、をしか るへき」 ○「めんく」
花みつの遺書が見つか る 花みつの遺書の内容 ・遺書の宛名 ・別当への遺書	○「坊主の御方へ」 ☆「御ち、のかたへ」 ○「ようせうのときより いま、で」 ●「あさゆふ御てをもひ きまいらせん」 ○「しやうくせ、の」	●「さいこのしやうそ く、きせたてまつらんと するに」 ○「坊主の御方へ」 ●「さとへ」 ○「よふ少より、人とな され申、十六のいま に、いたるまで」 ●「御てもひき」	○「坊主の御方へ」 ●「さとへ」 ●「仁義礼智信をそむき」	●「さいこのしやうそ く、きせたてまつる に」 ●「その身にこそ、せん くのゑんくわ、のか れかたくして」	●「さいこくのきぬを。 きせかへ給ふに」 ☆「へつたうの御かたへ」 ●「さとへ」
・法師への遺書	○「のちの世」	○「のちの世」	○「のちの世」	○「しやうくせ、の」 ●「れいきをそむく事」	○「しやうくせ、の」 ●「れいきをそむく事」

場面	京大本	静嘉堂本1	静嘉堂本2	高山本	武田本
<p>・月みつへの遺書</p> <p>・里への遺書</p>	<p>☆月みつへの遺書自体ナシ</p> <p>※言葉はなく、歌のみ</p>	<p>※言葉はなく、歌のみ</p> <p>○「との」</p> <p>●「御とふらひに、あつかり候は、ありかたかく候へく候」</p>	<p>○「羽なき鳥のこ、ちして」</p> <p>●「ち、」</p>	<p>○「はねなき、とりこ、ちして」</p> <p>○「との」</p>	<p>○「はねなき鳥の心ちして」</p> <p>●「ち、」</p> <p>●「あととふらひて、たひ給へ」</p>
<p>岡部、書上山に上る</p> <p>・使いの法師へ</p>	<p>※ナシ</p>	<p>●「我こそは、さきたつへきに、さきたて、なき跡といてぬる、袖かな」</p>	<p>●「我こそはさきたつへきにさきたて、なき後とひてしほる袖かな」</p>	<p>※ナシ</p>	<p>※ナシ</p>
<p>人々、嘆く</p> <p>・岡部、嘆く</p>	<p>○「かんたうするとは、いひつるなり」</p> <p>●「おさあひ物なれば、かくもんをも、せすして」</p> <p>○「我をもつれて、ゆけや」</p>	<p>○「かんたうとは、いひつるなり」</p> <p>●「おさあひ物なれば、ものをも、そんなし、またかくもん、心にいれぬほとに」</p> <p>○「我もるともに、くしてゆけや」</p>	<p>○「かんたうとは、いひつるなり」</p> <p>●「おさあひ物なれば、ものをも、そんなし、またかくもん、心にいれぬほとに」</p> <p>○「我もるともに、くしてゆけや」</p>	<p>○「かんたうとは、いひつるなり」</p> <p>●「おさあひ物なれば、ものをも、そんなし、またかくもん、心にいれぬほとに」</p> <p>○「我もるともに、くしてゆけや」</p>	<p>●「いまたおさなき、ものなれば、かくもんをも、心にいれざるにより」</p> <p>○「我をもつれて、ゆけや」</p>
<p>人々、仏道に入る</p>	<p>☆「まつわう丸」</p> <p>●「べつたうも又、うき世にありてもなにかせんとて、ある山ふかくとちこもり」</p>	<p>○「月みつ殿は、あにのしこつを、くひにかけ」</p> <p>○「月光殿は、なげき給ひしか骨ひろいて」</p> <p>●「別当も浮世の住居せんなしとて、さしも栄花をふり捨て、其山のおくに庵室をむすひて」</p>	<p>○「月みつとは、なくく、しやきやうの、こつを、ひろひて、くひにかけ」</p> <p>●「へつたう、ふかき山に、あんしつをむすひ」</p>	<p>○「月みつとは、なくく、しやきやうの、こつを、ひろひて、くひにかけ」</p> <p>●「へつたう、ふかき山に、あんしつをむすひ」</p>	<p>○「月みつ殿も、なくく、あにのはつこつをとり」</p> <p>●「へつたうも、うき世のすまゐ、せんなしとて、なを山ふかく、とちこもり給ふ」</p>
<p>結び</p>	<p>☆京大本のみ末尾に歌</p> <p>○「みなぶつほさつの御はうべん」</p>	<p>○「ほとけ、はうへんにて」</p>	<p>○「ほとけ、はうへんにて」</p>	<p>○「ほとけ、はうへんにて」</p>	<p>○「ほとけの、はうへんにて」</p>



各線は近似度の高さを表す。太線、細線、破線の順で、本文上の共通性が高い。

静嘉堂本1と高山本、静嘉堂本2と高山本、静嘉堂本1と静嘉堂本2、高山本と武田本、の順で共通する要素が多く見出され、逆に京大本と高山本、京大本と静嘉堂本2は共通する要素が少ない。

各本の特徴を挙げると、次のようになる。

京大本は最も本文が短く、他の本に比べて記述が簡略であることが多いが、独自の本文も所々見受けられる。

静嘉堂本1は他の諸本と共通する要素を多く持ち、独自の本文も少ない。

静嘉堂本2には、内容や表現の繰り返しが目立つ。また、漢字の使用が目立つ。

高山本もまた、他の諸本と共通する要素を多く持つが、独自の本文も多く見受けられる。

武田本は全体的に独自性が目立つ。特に、花みつの母と月みつの描

御伽草子『花みつ月みつ』の諸本について(大地)

写からは、他の諸本とは異なる人格であるような印象を受ける。

三、諸本の比較

諸本五本を詳細に調べたところ、どれも話の大筋には大差が無いが、細部には異同があることがわかった。その中でも物語の整合性に関わると思われる違いを持つ場面について、内容の検討を行いたい。

(一) 申し子の場面

一点目の違いは、申し子の場面である。

岡部が申し子を思いたつ部分では、静嘉堂本2の「四方の梢の色つくを見て思ふやう」が他の諸本にはない。また、武田本のみ「たんにの子をやしなふ事も、のちの世までの、たよりとは、なりかたし」と、申し子の前に養子も検討している。

祈誓の部分では、女房が参籠する所が、京大本「ほつけじ」、静嘉堂本1「法花たう」、静嘉堂本2「はせ」、武田本「所のうち神」、高山本「ほつけち」となっている(なお、岡部はいずれも書写山に参籠することになっている)。

夢の内容では、高山本には女房の夢について「きたのかたも、おなしゆめなり」とあるのみであるが、他の諸本では女房の夢の内容と解釈についても記述されている。また、本作の終盤における花みつの遺書の内の一首に「は、ちりて」とあり、「葉が散る」ことがすなわち「母が死ぬ」ことを示すことがわかる。似た趣向が「神道集」「二所権

現の事」の常在御前の歌にも見られる。

菊の花つぼめる枝もとどまらじはは散りはてて後の嘆きに

（菊の花の、つぼみの枝も残らず落ちてしまおうでしょう。葉は
「母」散ってなくなってしまうあとの悲しみのために）⁽⁸⁾

したがって、女房の行く末の暗示としては、葉の散る夢（花みつが幼い時に自らが死ぬ）が、岡部の行く末の暗示としては、盛りの花の散る夢（盛りの時の花みつを失う）が正しい。そのような形となっているのは、京大本と、静嘉堂本2、武田本である。また、夢の解釈としては、所願成就を確信しながらも不安を残すのが自然な形であろう。そのようなになっているのは、京大本と武田本である。

したがって、この場面で内容的に整合性を持っているのは京大本と武田本であると思われる。

（二）月みつ（実は花みつ）殺害の場面

花みつが二人の法師に月みつ殺害を依頼する部分は、京大本、静嘉堂本1、静嘉堂本2、高山本では、花みつが自殺を仄めかすので二人の法師はやむなく了承するのだが、武田本のみ二人の法師の積極的な姿勢が窺える。

花みつと別れた二人の法師が月みつ殺害を了承してしまったことを嘆く部分では、静嘉堂本1、高山本では、月みつの父母のことにも思いを馳せている。「つゆ」「あさかほ」「月」という語句が京大本、静嘉堂本1、高山本に共通して見られるが、京大本の文脈では花みつの

嘆きともとれる。武田本にはこの部分がなく、月みつ殺害に積極的だったこととの整合がとれているように見えるが、次の部分に嘆きの言葉が挿入されており、結果的に整合性を欠くことになっている。

京大本では、月みつ殺害依頼の場面は八月十五日の夜であり、花みつが二人の法師に月みつ殺害方法を説明する中で、十六日に、という指示がある。殺害の日を花みつの言葉として明示しているのは京大本のみである。殺害の場面は、十六日の暮方になっている。

静嘉堂本1では、殺害依頼の場面には日付はないが、名月とあるので八月十五日だとわかる。殺害の場面は、八月十五日の夜が明ける頃である。

静嘉堂本2では、殺害依頼の場面は八月十五日の夜、殺害の場面は十六日の夜である。

高山本では、殺害依頼の場面には日付はないが、名月とあるので八月十五日だとわかる。殺害の場面は、八月十六日の夜である。武田本もまた高山本と同様である。

静嘉堂本1では、花みつの部屋が東向きであるとするが、静嘉堂本2では西向きであるとす。他の諸本にこの記述はない。

月みつ（実は花みつ）の姿が詳述されている部分は、静嘉堂本2と高山本が相似している。顔の美しさについての記述は静嘉堂本2に特徴的であるが、ここは月みつ（花みつ）が月を背にしているため、正体が花みつとわからないという場面であるので、静嘉堂本2の記述は整合性に欠けている。

この部分では武田本の本文量の多さが目立つが、これは、他の諸本では二人の法師が嘆く部分にあった内容を、この場面へ入れているからである。二人の法師が月みつ殺害の段取りを打ち合わせる部分、月みつ（実は花みつ）の姿を前に二人の法師が逡巡する様子を描いた部分は、他の諸本にはなく、武田本特有のものである。しかし、こうした嘆きや逡巡は、花みつに月みつ殺害を依頼された時に花みつが自殺を仄めかすのでやむなく了承した、という部分があつて初めて説得力を持つものであり、積極的に月みつ殺害を了承した武田本の文脈においては整合性に欠けると言わざるを得ない。

花みつの部屋を訪ねる部分では、京大本、静嘉堂本1が部をたたき、静嘉堂本2、高山本、武田本では声をかけている。やさしい声で、としているところが静嘉堂本2と武田本に共通している。

京大本のみ、「花みつ殿は月みつ殿のすがたに身をなして」という一文で、花みつが月みつに変装していることを既に明らかにしている。

この場面において特筆すべき違いは、やはり武田本の独自性である。このような独自性は、岡部が京から月みつと月みつの母を連れて里に下った際に喜んで見せる花みつの母の描写や、それに呼応した花みつの母の遺言にも見られる。つまり、武田本では、他本には無い描写が見られた際には、それに呼応するようにして他の場面も他本とは異なる描写が見られ、整合性を保っていた。しかし、この場面の二人の法師の嘆きの位置の検討において、武田本には配列に手を加えた跡

が見られたことから、武田本に見られる独自性は後に改められたものである可能性が高いという結論に至った。

(三) 花みつの遺体を前に岡部が嘆く場面

物語の整合性という点において最後に指摘しておきたいのは、静嘉堂本1と高山本にのみ見られる岡部の言葉である。

【静嘉堂本1】 かんたうするとは、いひつるなり

【高山本】 かんたうとは、いひつるなり

岡部が花みつを疎ましく思っている、という別当の誤解と、別当が花みつを疎ましく思っている、という岡部の誤解と、父と師匠のいずれにも疎まれていて、という花みつの誤解は、いずれも当事者がそのことを口に出して確認することができなかった為に生じたものである。ここでの「いひつるなり」という岡部の言葉は、そのことと矛盾している。

以上の三点から、物語の整合性において優れているのは京大本と武田本であるが、武田本は本文の一部が後に改められた可能性が高いということがわかった。

内容・構成から判断するに、善本と呼ぶに相応しい本は京大本であろう。

四、まとめ

本稿では、諸本の本文比較と、内容の検討を行った。諸本を系統立てるのはやはり困難と言わざるを得なかったが、内容の検討を通して、善本と呼ぶに相応しいのは京大本であるという結論を得た。

『花みつ月みつ』は、その内容については評価されてきたにも関わらず、研究の中では常に異色のものとして扱われてきた。その理由として、従来の御伽草子研究における分類の、いくつかの要素（稚児物、継子譚、宗教小説）を持っていながら、その親疎は複雑であり、どの分類からも論じることが困難であるということが考えられる。筆者は、このような構造を持つ『花みつ月みつ』を、分類という研究の手法の硬直をあらわしている作品と見ている。

本稿では、そうした着想をもとに『花みつ月みつ』を論じる基礎作業として、善本を定めるといふ試みを行った。

次稿では、本稿で得られた結論をもとに、京大本を中心に据え、他の諸本を参照しつつ、『花みつ月みつ』の分析を試みたい。

注1) 徳田和夫編『お伽草子事典』（東京堂出版、二〇〇二・九）、濱中修「花みつ月みつ」の項。

(2) 奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』三省堂、一九八二・八。

(3) 『京都大学蔵 むろまちものがたり 第一二巻』（臨川書店、二〇〇三・六）所収、「翻刻 花みつ上・下」に拠る。引用に際しては一部記号を省略し、私に句読点を施した。静嘉堂本1、高山本、武田

本についても同じ。

(4) 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成 十』（角川書店、一九八二・二）〈320〉に拠る。

(5) マイクロフィルム『静嘉堂文庫所蔵 物語文学書集成 第三編 説話物語・擬古物語・物語草子』（雄松堂フィルム出版）を筆者が翻刻し、引用に際しては振り仮名を省略し、私に句読点を施した。

(6) 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成 補遺二』（角川書店、一九八八・二）〈463〉に拠る。

(7) 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成 十』（角川書店、一九八二・二）〈319〉に拠る。

(8) 貴志正造訳『神道集』平凡社、一九六七・七。